

東幡豆紀行ガイド

地図上の番号は、本書に掲載している写真が、どこで撮られたものか、もしくはどこを写しているものか、おおよその位置を示したものです。本編の各ページの上にはテーマとともに番号が書かれており、地図上の番号はその番号に対応しています（船や漁などを写した写真は場所が定まらないので、海の上に番号を示しました）。

番号によっては、撮影した地点だったり、写真に写っている場所だったりします。これは、とくに昔の写真は正確な場所を特定できないこと、あるいは写っている場所が広範囲で番号を示せないこと、もしくは撮影場所より写っている場所のほうが東幡豆を知ってもらうにはいいこと、などの理由によります。また、昔と今の場所が大きく違う場合を除いては、ひとつの番号は写真の枚数に限らず1箇所しか記載していません。より詳細な場所を知りたい方は、ぜひ、東幡豆に足を運び、楽しく散策しながら探してみてください。



今昔
東幡豆
*Past and Present
in Higashihazu*

1. 産業を育む海

漁業、養殖業、採石業、造船業、海運業など
多様な産業を育んできた
東幡豆の海の昔と今を紀行する。

HIGASHIHAZU
GUIDE MAP



昔
Past

【昭和40年（1965）頃・ノリ支柱柵養殖の様子*】昭和30年（1955）に始められ、昭和61年（1986）まで続いた東幡豆のノリ養殖。昭和32年（1957）に12戸あった東幡豆のノリ養殖業者は、昭和35年（1960）には43戸へと増えている。愛知県のノリ養殖が養殖面積・生産量ともにピークを迎えたのは昭和48年（1973）。その後、生産拡大による過剰供給により、安定した収入が得られず、県全体のノリ養殖は縮小していった。

*：西尾市幡豆歴史民俗資料館蔵

★柱柵養殖とは、「ノリそだ」や「ノリひび」と言った竹木を束ねたものを浅瀬に立て、柵を作りそこに生えてくるノリを摘む養殖法。



今
Present

【2014年・アサリ腰マンガ漁の様子】東幡豆の全体漁獲量の中で最も大きな割合を占めるアサリ採貝漁業。漁法には、腰マンガ漁と手堀り漁の2種類がある。



★腰マンガ漁とは、「マンガ」と呼ぶ漁具を腰につないで、爪を砂に潜らせながら引いてアサリを獲る漁業。



昔
Past

【昭和 35～40 年（1960～1965）頃・海で魚とりの様子* 及び昭和 30 年代・地引網の様子】地引網（右上）と地引網を彷彿させる写真（上）。東幡豆の地引網は、昭和 25 年（1950）頃から東幡豆の中柴、桑畑等の海岸で始められ、昭和 30 年代後半まで続いた。キビナゴ、カタクチイワシ、アナゴ、アジの幼魚、サバなどが 5 月から 7 月にかけて漁獲されていた。



今
Present

【2013 年・地引網体験の様子】今は商業目的の地引網は行われず、環境教育を目的とする子ども向けの地引網体験イベントが、東幡豆漁協の主催により実施されている。昔から変わらないのは、網に入った魚を興味津々で眺める子どもたちの様子。



今
Present

【2016年・東幡豆漁協市場の様子】平屋 671.50㎡の地方卸売市場。小型機船底引網漁業や角建網漁業などでとれた様々な水産物が取扱われている。生産者→産地市場→消費地市場→小売り→消費者という水産物流通経路の中の産地市場に当たる地方卸売市場は、漁獲物の集荷、選別、決済等の機能を持っており、漁獲物の種類が多い沿岸漁業ではとくに重要な役割を果たしている。

★小型機船底引網漁業とは、漁船の後ろに袋状の網を曳いて魚や貝を獲る漁業で、古くから愛知県あいちの代表的漁業となっている。主な漁獲物には、カレイ、クルマエビ、シャコ、アサリなどがある。

★角建網漁業は、沿岸域に漁具を設置し、来遊してくる魚を獲る漁業で、小型定置網漁業の一種である。主な漁獲物には、スズキ、コノシロ、アイナメなどがある。



早朝 3 時頃から 4 時頃まで開場する市場。あがるのは、シタビラメ、カレイ、ワタリガニ、シャコ、クルマエビ等々。





昔
Past

【昭和40年（1965）・造船所の様子】桑畑船溜り近くにあった東幡豆の造船所。幡豆石と呼ばれる石材が桑畑山など近くの山から採石されており、その石材を各地に運ぶための船を製造していた場所。森川近くにも造船所があった。船に旗を揚げているのは新造船を祝う様子。



今
Present

【2016年・造船所があった場所近くから眺める桑畑船溜りの様子】今では造船は行われていない。船に旗を揚げて新造船やお正月を祝う風習は、今でも引き継がれている。



昔
Past

【昭和45年（1970）頃・団平船の様子】和船のひとつで船底は平たく、石材等重量のあるものを輸送するのに活用されていた団平船。今では鋼船に変わっている。幡豆歴史民俗資料館では、昭和30年（1955）頃に幡豆石を団平船に船積みする風景の模型が展示されている。

昔

Past

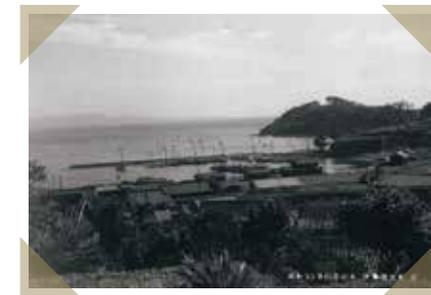
【昭和25年(1950)頃(右)及び昭和31年(1956)頃(下)・石積場の様子】幡豆石を船積みするための場所。花崗岩という種類の幡豆石は、戦国時代に名古屋城築城のときの石垣として用いられており、硬くて重い等の特徴から、古くから河岸や海岸の護岸などに使用されている。



昔

Past

【昭和34年(1959)・伊勢湾台風通過後(上)及び伊勢湾台風直前(下)の様子】明治以降最大規模の台風被害であると言われた伊勢湾台風被害。漁船や団平船等の船舶が家屋の目の前まで押し上げられている様子が台風の凄まじさを物語っている。幡豆町においては、死者、重軽傷者を含め245名の人的被害とともに、696戸に及ぶ家屋の被害、総額3億3,000万円ほどに及ぶ農林水産業などの産業被害を記録。



伊勢湾台風前(昭和33年)

今

Present

【2016年・石材埠頭の様子】石材産業の発展に伴い、運搬船や栈橋の大型化が見て取れる。2017年現在、東幡豆には採石業者が2社ほどあり、昼間は石材を埠頭に運ぶトラックでにぎわう。また今では、幡豆石を加工した優勝カップを競うことから「ストーンカップ」と名付けられた手作りのいかだレースが、毎年8月に東幡豆海岸で行われており、夏の風物詩として観光客を魅了している。



今
Present

【2015年・東幡豆の海の様子】穏やかに広がる東幡豆の海。多様なものを内包する東幡豆の海。多様な産業を育んできた東幡豆の海。



東幡豆の海が多様な姿。

東幡豆を支えた産業

漁業、採石業、造船業、海運業など、多様な産業を育ててきた東幡豆の海であるが、ここでは、東幡豆を支えた代表的な産業とも呼べる漁業と採石業について、もう少し詳しく覗いてみることにする。

●漁業

東幡豆において、ノリ養殖業①が昭和30年(1955)から昭和61(1986)年まで行われ、地引網漁業が昭和25年(1950)から昭和30年代後半まで行われていたことは、写真で見えてきた通りである。ノリ養殖が次第に縮小していったのには、生産拡大による過剰供給により安定した収入が得られなくなった愛知県全体の背景がある。さらに、幡豆町は当時生産の重点が置かれていた黒ノリの生産期間が他町と比べて短く、その主力が青ノリとなっていたことから、生産量に占める黒ノリの割合が小さいなどの課題も抱えていた。

一方、地引網漁業については、「大した漁はないが、ろくろ廻しの日当くらい出ますよ」と、満足気に語る当時の地引網漁師

の様子が記録されている。「ろくろ廻し」は、陶芸に用いる機械のことであり、愛知県は日本で最大級の窯業地を有するとともに、陶磁史上重要な位置を占めていることから考えれば、陶芸関連は当時潤いのある職業であったことが推測できる。その「ろくろ廻し」に地引網漁業が例えられていたのである。

今では、アサリ採貝漁業②が最も大きな割合を占めるようになっており、その他の主な漁業種類として、小型機船底引網漁業、刺し網漁業、小型定置網漁業(角建網)、つきいそ漁業などがある。2015年における漁業生産量の漁業種類別割合を見ると、アサリ採貝漁業が漁獲量全体の72.8%を占めており、トップとなっている。それに次いで小型底引網漁業が16.2%、小型定置網漁業が8.6%を占めている(p20図1)。産業の縮小、過疎化、高齢化、活力低下など、日本全国の漁業や漁村をめぐる情勢が厳しい中、如何にしてこれらの漁業、とくにアサリ漁業を生かし、地域経済へつなげるかが問われよう。

●採石業

幡豆石は、採石業のみではなく、石材を各地に運ぶための海運業や陸運業、海運に用いる船を製造するための造船業、造船に用いる木材の生産や販売業など、「一石多鳥」の効果をもたらしていた。それは、これらの産業と地元の人々とのかかわりからも確認することができる。一例として、今年(2017年)で築84年、創業67年の民宿鈴喜館の人々を挙げたい。現ご主人の祖父であり、鈴喜館を建てた当の本人でもある鈴木喜八氏は、当時大勢存在していた船大工向けに、木材の卸販売を行っていた。また、ご主人の父親は、東幡豆の近隣地域で、採石業を経営していた。もう一例として、今年で創業38年目となる民宿岡田屋のご主人は、父親の代から幡豆石の海運業を営んでいるのである。

東幡豆の採石業の発展に欠かせない存在として東幡豆港が挙げられる。p.20図2は、昭和24年(1949)から昭和39年(1964)における、東幡豆港の石材積出量の推移を見たものである。昭和24年に

は59,869tであった積出量が、昭和39年には208,801tへと、15年の間およそ3.5倍もの伸びを見せており、石材産業が大きく成長したことが確認できる。とくに、昭和28年(1953)から昭和30年(1955)には69%の成長率を見せるとともに、昭和34年(1959)から昭和36年(1961)には83%の高い成長率を見せている。それは、硬くて重いなどの特徴を有する幡豆石が、昭和28年に発生した台風13号や昭和34年に発生した伊勢湾台風⑧の復旧工事に、大量に用いられたからであるとされている。

かつては、トロッコで丁場(石切場、採石場)から積み出し港まで運ばれ、団平船⑥で各地に運ばれていた幡豆石の運搬は、今ではトロッコがトラックへと、団平船が「ガット船」と呼ばれる鋼船へと変わっている。幡豆石や採石業は、今でも東幡豆の経済において大きな役割を果たしており、今後は観光業など他産業との連携により地域振興を図ることが期待されよう。

(李 銀姫)

旅日記
Vol.1

東幡豆にあそんだ
楽しい旅の記録。
はじまりはじまり～

名鉄蒲郡線



早く着かないかな～



蒲郡駅～吉良吉田駅間を結ぶ2両編成の赤いかわいい電車で、東幡豆へ向かいます。車窓から三河湾や西尾市の町並みのんびり眺めることができます。

東幡豆駅に到着

小さな無人駅だけれど人の行き来は意外と多いのです。駅で会った地元の方々と何気ない会話が弾みます。



赤い屋根がキュート

海岸にて



駅からわずか徒歩3分のところに、心地よい海風にあたりながらのんびり散歩ができる海岸があります。小さな子どもは時を忘れてシーグラスや貝殻拾いに夢中になります。たくさん集めて満足そう。



たくさん拾ったね

冬鳥の訪れ



11月頃にはホシハジロやヒドリガモ、オオバンなどの冬鳥が飛来し、海辺で羽を休めています。バードウォッチングが楽しめます。